



東京大学学術機関リポジトリ

UTokyo Repository

Title: シェリングと後妻パウリーネ
——シェリング夫妻のアイドル・ゲーテを中心とした交流関係——
Schelling and His Second Wife Pauline: Their Interaction Centered
upon the Idol-poet Goethe

Author: 石原あえか Aeka ISHIHARA

Additional information(追加情報) :

上記論文 18 頁 4 行目に以下の訂正があります。

「実母を亡くし、…」(誤) → 「実母もしくは…」(正)

謹んでお詫び申し上げるとともに、お手数ですが、ご修正をお願い致します。

シェリングと後妻パウリーネ

シェリング夫妻のアイドル・ゲーテを中心とした交流関係

石原 あえか

1. 本論のきっかけ 2016年度日本シェリング協会総会特別報告

詩人ゲーテ（1749-1832）が哲学者フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヨーゼフ・シェリング（1775-1854）に初対面したのは、1798年5月28日のことである。仲介者はシェリングと同郷のシュヴァーベン出身で、イエーナ大学ですでに歴史学を教えていた詩人シラー（1759-1805）だった。彼は大学人事権をもつ枢密顧問官ゲーテに若いシェリングをアピールするために、自邸で両者を引き合わせたのだった。

2016年7月、日本シェリング協会総会（於・京都産業大学）で、筆者が専門とするゲーテとシェリングのイエーナ時代の関係を、彼の最初の妻カロリーネ・ミヒャエーリス＝バーマー＝シュレーゲル＝シェリング（1763-1809）との関わりも含めて、特別報告を行った。ハイフンをつないだ長い姓が物語る彼女の波乱万丈の生涯のうちでも、ドイツ・ロマン派の主要人物のひとりアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル（1767-1845）と離婚し、ひとまわり年下のシェリングと結ばれるまでのイエーナ時代は、愛娘の夭折も含め、彼女にとっては精神的に辛い時代だった。対するシェリングは弱冠23歳で1798年にイエーナ大学に招聘されたが、この人事には当時48歳だったゲーテの関与が判明している。つまり冒頭で紹介したシラーのアレンジによる対面は、その狙い通り、ゲーテに好印象を残し、翌日以降、トントン拍子に就職が決まったのだった。

むろんゲーテの文学作品、それもシェリングの著作タイトルそのまま『世界霊 *Weltseele*』¹と名づけられた詩の成立など、両者の執筆活動における相互影響関係はこれまでも複数のゲーテ研究者によって繰り返し論じられてきた²。だが同時に興味深いのは、そうした公の活動領域だけでなく、私生活にも及ぶ親密な関係性である。具体的に言えば、バート＝ボックレットでの事件——すなわちカロリーネと先夫バーマーの娘アウグステ（1785-1800）の急死とそれに関与したシェリングの医療ミス疑惑など——が引き金となり、精神的危機に陥ったシェリングをカロリー

¹ シェリングの『自然哲学の諸考察 *Ideen zu einer Philosophie der Natur*』（1797）および『世界霊について *Von der Weltseele*』（1798）に触発されてゲーテが1803年に発表した詩だが、最初は『世界創造 *Weltschöpfung*』と題されていた。1806年以降、現在の『世界霊』と題される。

² たとえば Braun, Otto: *Goethe und Schelling*. In: GJB 9 (1922), S.199-214; Beyer, Wilhelm Raimund: *Natur und Kunst. Goethes Interesse am Jenenser Schelling*. In: GJB 92 (1975), S.9-28; Adler, Jeremy: *Schellings Philosophie und Goethes weltanschauliche Lyrik*. In: GJB 112 (1995), S.149-165 他。

ネの願いを聞き入れて一定期間自宅に引き取ったのも、またその後、今度はシェリングの嘆願により、シュレーゲル夫妻の離婚調停を円滑に進めるため暗躍したのも、他ならぬゲーテだったのである。

上述の内容は、別途、同会機関誌『シェリング年報』25号（2017年刊行予定・準備中）で公表予定だが、報告準備・資料調査の過程で、シェリングの先妻カロリーネについては再評価が進み、近年多くの研究成果が発表されているのに対して、後妻パウリーネ（1786-1854：旧姓ゴッター）に関してはドイツ語圏でも参考文献がもともと少ないうえに、かなり古くなっており、最近の研究成果はあまり見当たらないことに気づいた。さらに言えば、両方の妻に注目した研究も、半世紀前に刊行されたカーン＝ヴァラーシュテルンの『シェリングの妻たち：カロリーネとパウリーネ』（1959）³を思いつく程度である。他方、シェリング自身の人柄や彼を取り巻く人々との交流に注目してみると、思いのほかゲーテとの接点が多いことに気づく。特にカロリーネの死後、シェリングと急速に接近し、後妻となるパウリーネについては、早くから家族ぐるみでゲーテとの付き合いがあった。哲学研究分野ではシェリングの著作に主な関心が向くのは当然であるし、シェリングについてのみ語るなら、彼を中心に据えるのが定石だろう。だが、シェリング夫妻を語るにあたっては、むしろゲーテを中心に据えた方が、これまでわかりにくかった相互人間関係が明らかになりそうだ。本論では、あえてゲーテに関する文献を駆使し、哲学者シェリングと彼の2番目の妻パウリーネとの関係と役割を再構築してみたい⁴。

2. パウリーネの周辺

(1) パウリーネの父・ゴッター

パウリーネの父、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ゴッター（1746-97）⁵は、ゲーテが仕えるザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナッハ公国のお隣、ザクセン＝ゴータ＝アルテンブルク公国の都ゴータに生まれた。「詩神の集う宮廷」と言えばヴァイマルが連想されるが、実はゴータもフランス人哲学者ヴォルテールが逗留するなど、文化的水準の高い宮廷であり、さらに言えば両宮廷はどちらもエルネスティン系で、相互交流も盛んだった。フランス語を得意としたゴッターは、ゲッティンゲンでの学生時代に当地のアッカーマン演劇協会で、後に同様にゴータ宮廷で活躍する演劇人にして「ドイツ俳優の父」、コンラート・エクホーフ（1720-78）と知己を得た。

ゴッターは、大学卒業後はゴータに戻り、宮廷に出仕したが、1772年、ヴェツラーにゴータ視察団の一員として出張の折、ゲーテと親交を深めた。よく知られているように、シュトラースブルク大学法学部を卒業したゲーテは高等法院で研修中であり、また偶然エクホーフも劇団を率いて、ヴェツラーで巡業中だった。ふたりの文学青年の話が弾んだことは想像に難くない。ゲーテの自伝的作品『詩と真実 *Dichtung und Wahrheit*』第3部第12巻には、ゲーテとゴッターがイギリス詩人ゴールドスミス の詩『荒れ果てた村 *Deserted Village*』のドイツ語訳を競ったこと、ま

³ Kahn-Wallerstein, Carmen: *Schellings Frauen: Caroline und Pauline*. Bern (Francke) 1959.

⁴ 本稿と内容的に対の前編となるシェリングと先妻カロリーネ（参考文献含む）については、日本シェリング協会機関誌『シェリング年報』第25号所収予定の拙文を参照されたい。

⁵ ゴッターの詳しい経歴については、1802年に刊行の彼の遺稿詩集：Götter, Friedrich Wilhelm: *Gedichte*. 3. *Literarischer Nachlaß*. Gotha (Perthes) に収められている伝記を参照した。

たその出来栄は、ゴッターの方が一枚上手だったことなどが記されている。1774年には再度ゴッターが、フランクフルトの実家に戻っていたゲーテを訪ね、旧交を温めた。

まもなくヴェツラー時代の片思いや友人の悲恋と自殺などの経験を織り込んだ書簡小説『若きヴェルテルの悩み *Leiden des jungen Werthers*』(初稿は匿名で1774年刊行)で一躍文壇の寵児となったゲーテは、自分よりも年下で即位したばかりのヴァイマル公カール＝アウグスト(1757-1828、1815年以降大公昇格)の招待を受け、ヴァイマル宮廷に出仕し、その後、高級官吏としてのキャリアを積む。他方、ゴッターはお隣ゴータ宮廷の官房長官を務めながら、演劇にも玄人並みに携わった。ゴータと言えば、フリーデンシュタイン城内の今も現役のエクホーフ劇場が有名だが、ゴッターは1773年以来、当地の愛好者劇団団長として、自演もすれば、舞台監督も引き受けた。ゲーテ作戯曲『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン *Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand*』(1773年成立、1774年初演)の上演も手掛けている。喜劇や音楽劇の執筆や翻訳も多数あるが、なかでも畢竟の作と言えば、シェイクスピアの『嵐／テンペスト』に触発されて書いた『幽霊島 *Die Geisterinsel*』⁶ だろう。

シェイクスピアの『テンペスト』については、すでにヴィーラントのドイツ語訳(1763年)が存在したが、あまり作品普及効果がなかった。これに対して、いわゆる啓蒙主義時代のドイツにおけるシェイクスピア受容の重要な作品のひとつに挙げられるのが、ゴッターがそのエッセンスを抽出し、音楽劇に改作した『幽霊島』である。ゴッターの『幽霊島』は、計5名の作曲家が付曲したが、その最初がライヒェルトの付曲で、1798年5月19日にヴァイマル劇場で初演された。もっとも原作者のゴッターは、1797年3月18日に15歳を筆頭に14歳、10歳 [=パウリーネ]の3人の娘を遺して病死していた。遺作としてシラー主催の雑誌『ホーレン *Horen*』(1797)に掲載されたが、未完の遺稿を整理・完成させた影の功労者は、シュレーゲルの先妻であり、ゴッター夫人の親友でもあったカロリーネに他ならない。彼女の奔走なくしては、ゴッターの遺稿は完成せず、初演に漕ぎつけることはまず不可能だった。

(2) パウリーネの母ルイーゼとカロリーネ・シェリング

ゴッターがゲーテの旧友である一方、ゴッターの妻でパウリーネの母ルイーゼは、カロリーネの少女時代から生涯変わらぬ親友だった⁷。ゲッティンゲン大学の東洋学兼神学教授ミヒャエリスの娘カロリーネは11歳になると、2年間の予定でゴータ宮廷顧問官シュレーガー夫人(Madame Schläger)のもとに「家事見習い」に出された。と言っても少女達の寄宿制私塾のようなもので、行儀作法や教養を身につけさせる狙いが多分にあった。このシュレーガー夫人宅の近所に住み、自宅から私塾に通っていたのが、後にゴッター夫人となるルイーゼ・シュティーター

⁶ 本作品については註5の全集だけでなく、フランクフルト・ゲーテハウス/FDH 附属図書館所蔵の総譜 Reichardt, Johann Friedrich [Komp.]: *Die Geister-Insel: ein Singspiel in 3 Akten nach Shakespeares Sturm von J. F. Gotter*. Berlin (Musikhandlung) 1799も参照した。

⁷ ルイーゼとカロリーネとの関係については、Steguweit, Gisa: *Weibsbilder in Gotha um 1800: zwischen Anpassung und Aufbegehren*. Gotha (Druckmedienzentrum) 2015, S. 32-52のカロリーネに関する章 *Oft hab ich Gotha das Vaterland meines Herzens genannt: Caroline Böhmer-Schlegel-Schelling, geb. Michaelis (1763-1809)*を特に参照した。

(1760-1826) だった。

彼女は宮廷顧問官にしてゴータ市長カスパー・ヘルマン・ニコラウス・シュティエラーの娘で、カロリーネより3歳年上だったが、もともと読書家でませていたカロリーネにとっては、精神的にもつりあいがとれ、またどちらも実母を亡くし、若い継母との関わり方に悩むといった共通点も多く、以後、腹心の友になったのだった。

1780年1月、ルイーゼは14歳年上のゴータの官房長官兼戯作家ゴッターと婚約、同3月末に挙式した。翌1781年に長女パウリーネを筆頭に次女チェチーリエ、三女ユーリアが毎年生まれ、85年には長男グスタフが生まれた。しかし長男と長女は同年に夭折、翌86年に生まれた娘に夫妻は、亡くなった長女と同じパウリーネと命名した。この四女にあたる「2番目のパウリーネ」こそ、「シェリングの2番目の妻」になる運命の子供だった⁸。

さて、最初の夫ペーマーと結婚するも、夫の破傷風罹患による急死で未亡人となり、敵軍フランス士官との恋と別離、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルとの結婚と離婚、その間、最愛の娘アウグステを赤痢で失った哀しみも乗り越えて、ようやくシェリングと結ばれたカロリーネは、1809年、夫の両親をマウルプロンに訪ねた折、愛娘の命を奪ったのと同じ赤痢を発症する。容態は急変、9月7日に旅先で彼女は帰らぬ人となった。シェリングは茫然自失となり、同様に親友の急逝に衝撃を受けた母ルイーゼに代わって、お悔み状は娘パウリーネが代筆した。これが期せずして彼女が寡夫にして未来の夫となるシェリングに宛てた最初の手紙となった。

3. ゲーテのお気に入り、パウリーネと親友ジルビー

シェリングとパウリーネの最初の接点は、したがって1809年9月のお悔み状となるが、ゲーテとパウリーネの出会いは、それより1年前の1808年の夏、高給保養温泉地カールスバート〔現在のチェコ、カルロヴィ＝ヴァリ〕だった⁹。1789年12月29日生まれのパウリーネは、10代の終わり、カールした金髪に優しげな容姿で、「小姫 *Prinzesschen*」と呼ばれる愛くるしさだった¹⁰。幼い時から文学・芸術に親しみ、母やカロリーネと同様、ゴータ市内の私塾に通った彼女は、父ゴッターが毎週木曜日に自宅で主宰する上流階級を中心とした「お茶会 *Teegesellschaft*」と称する文化サロンの出席も早くから許されていたから、素直で明るいだけでなく、文学的会話や年輩の知識人たちとの社交にも臆することがなかった。

この見目麗しく、気立ても良く、聞き上手で躰の行き届いたパウリーネを、公務で同行が難しくなった夫の代わりに、ゼッケンドルフ夫人（1884-1854、Caroline von Seckendorff, 1812年に離

⁸ 彼女についても註7の *Steguweit: Weibsbilder in Gotha um 1800*、特に *Pauline die Zweite*, S.53-84 を参照した。

⁹ ゲーテとパウリーネの関係については、特に *Waitz, Eberhard: Goethe und Pauline Gotter. Mit Benutzung ungedruckter Briefe. Hannover (Bahn) 1919* を参照した。ちなみにカロリーネ・シェリングとゴッター家の往復書簡を編集した *Georg Waitz* はこの *E. Waitz* の父であり、シェリングの娘婿でもある。本書の執筆にはシェリング夫妻の未公開直筆書簡が多用されている。シェリング夫妻の独立した往復書簡集もなく、批判注釈版シェリング全集の書簡は現時点で完結していないため、以下、本書を引用出典〔*Waitz* と略し、頁数を添えて本文に組み込む〕としても利用する。

¹⁰ 前掲書 S.5 の注3 参照（友人で女流画家になったルイーゼ・ザイドラーの証言）。

婚し、1818年に医師アムベルクと再婚した)が5月から3カ月間にわたる高級保養地への旅の同行者に望んだのが、そもそものきっかけだった。カールスバートには丁度パウリーネの親友で、同じくゴータの枢密顧問官ツィーゲザーの娘ジルビー(1785-1855)が両親と一緒に逗留していた。しかもカールスバートには、還暦真近のゲーテが、秘書リーマー(1774-1845)を連れて長期保養中で、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代 *Wilhelm Meisters Wanderjahre*』(完成稿1829年)の執筆に取り組んでいた。もともとゲーテに対する敬愛を肌で感じて育ったパウリーネは、ゲーテ本人との出会いに感激するとともに、彼の誘いに応じて、朗読会やピクニックなどを一緒に楽しむようになっていった。

ちなみにパウリーネの親友ジルビーもゴータ在住、父親アウグスト・フリードリヒ・カール・フォン・ツィーゲザー(1746-1813)は同宮廷の侍従兼枢密顧問官で、ゲーテにとってはイエーナ大学の人事に携わる3歳年上の同僚だった。言い換えれば、この時期の哲学者フィヒテやシェリングのイエーナ大学招聘は彼らの功績である。イエーナ中心市街から7kmほど離れたドラックENDORFに領地をもち、イエーナ大学解剖学教授ローダーや出版業者フロマンなど、ゲーテと共通の知人・友人も多かった。そのローダー家で1802年3月に催された舞踏会に、金髪に映える勿忘草をあしらった純白のドレスで現れたジルビーの姿は、ゲーテに強い印象を残した¹¹。1807年5月にイエーナで再会してから、彼女はゲーテのお気に入りのひとりとなり、1808年夏には、ツィーゲザー家とカールスバートで合流する計画を立てた。その予定通り、ゲーテは5月4日に荷造りを完了してヴァイマルを立ち、イエーナでしばらく滞在の後、5月12日にカールスバートに向かった。15日にカールスバート到着、『親和力 *Die Wahlverwandschaften*』の執筆に着手。途中7月は、近くの小さな新保養地フランツェンバートにも滞在したが、8月末までを過ごした。ゲーテ到着の約1か月後、6月8日にジルビーが両親と到着、9日にはゲーテと再会。その後、お互いの宿を頻繁に往来するが、注目すべきは6月14日のゲーテの日記で、ツィーゲザー家の宿を訪ねると、「ゼッケンドルフ夫人とゴッター嬢」が居合わせた(WAIII-3, S.347)。

ツィーゲザー一家が7月1日にフランツェンバートに出立した後も、ゼッケンドルフ夫人とパウリーネは、引き続きリーマー同席でゲーテとお茶に招かれた。植物学の研究がてらゲーテと早朝の散歩を楽しんだこと、でも3か月ぶりに自宅に戻り、母親や妹と再会できて嬉しかった、とパウリーネはシェリングの妻カロリーネに1808年9月6日付の手紙で無邪気に書き送った。これに対してミュンヒェン在住のカロリーネは、9月16日付で、

お母様に手紙を書こうとしていた矢先に、貴女からの手紙が届いたの。その読後感が消えないうちに、お嬢さんの方に御返事するわ。[...]どのくらい植物学を理解したのかしら、ゲーテが植物のメタモルフォーゼをすべて解説してくれたとか、ずっと老紳士の瞳を見つめていたようだけれど、シェリングですら、お父さんのゲーテじゃなくて、そばにいた若い方を流し見て

¹¹Koch, Herbert: *Goethe und Silvia von Ziegesar*. In: *Goethe* 16 (1954), S.225-234. なお、パウリーネ以上にジルビーは、『親和力』オットーリエの実在モデルとして注目されてきた。1808-10年までゲーテとジルビーは頻繁な文通と訪問を行っている。ジルビーは1814年6月にイエーナ大学神学教授ゲーテと結婚、翌年生まれた子供の洗礼代父のひとりがゲーテだった。

いたのでは、って言っているわよ。だってリーマーが同行していたなら、おくびにも出さないけど、ご子息もそばに居たんじゃない？ (Waitz, S.10)

と茶化し、でもゲーテが『遍歴時代』に着手しているのは嬉しい、と返信した。パウリーネが同世代の友人以外に、母の親友カロリーネと頻繁に文通していることにも注目したい。

他方ゲーテは、旧友の忘れ形見で、今やお気に入りのパウリーネの気をひこうと、9月28日付でタッソーの牧歌劇『アミンタ *Aminta*』美装版を彼女に贈っている。カールスバートでの「次はヴァイマルかイエーナで再会しよう」という約束を思い出させる意図もあったのだろうか、いずれにせよパウリーネは約束を守り、10月末にヴァイマルに到着した。宿泊先はヴァイマルの上級教会役員兼宮廷牧師で、ゲーテ夫妻の結婚式を取り仕切ったヴィルヘルム・クリストフ・ギュンター宅だった。この時のゲーテの歓待ぶりは、ユリウス・ヴァーレの論考「ゲーテ邸の客達」の第1章「パウリーネ・ゴッター 1808年の場合」に詳しい¹²。ヴァイマル・ゲーテ協会編『ゲーテ年鑑』(1926)所収——90年前——の論考なので、いきなり冒頭2頁弱に1808年12月13日付ゴータで書いたパウリーネの回想が引用され、その後にポイントを落とした髭文字でぎっしりと著者の解説と注が3頁強続くような古めかしい書式をとっている。冒頭の引用文を簡単にまとめると、到着早々、パウリーネはすぐに朝食に招かれ、ゲーテは彼女にカールスバートを描いた自作の彩色風景画を何枚も贈った¹³。ヴァイマル滞在中は頻繁に自邸に招き、芝居がかかれれば、ゲーテは彼女を必ず劇場に伴い、自分専用の棧敷席に侍らせた。「お芝居がつまらない時は、ずっとおしゃべり」を楽しんだという。男性の学者や知識人ばかりが集うヨハンナ・ヘンリエッテ・ショーペンハウアー (1766-1838、哲学者ショーペンハウアーの母でヴァイマル在住) のサロンにも、ゲーテは彼女を伴った。主催者の夫人を除けば紅一点という状況でも、パウリーネは多少の戸惑いは隠せなかったが、隣の席の老ヴィーラントと知己を得たことを喜んでいる。まだ十代の乙女の穏やかで優しい物腰に、老ゲーテが惹かれたのは当然だろう。これらはゲーテの日記でも裏付け可能で、たとえば11月6日には彼女を含む客たちと正餐後、「夕方はショーペンハウアー夫人宅へ：ゴッター嬢を除くとほとんど男性ばかり」(WA III-3, S.397)、11月9日は一緒に読書をし、「夜はパウリーネ・ゴッター嬢と棧敷席で一緒に観劇、その後、彼女を送る」(同、S.398)、11月11日も「ショーペンハウアー夫人宅、その後ゴッター嬢送り届ける」(同、S.398)、11月14日は「バウムバッハ嬢とパウリーネ・ゴッター嬢とカメラ・オブスキュラを操作」(同、S.399)と、頻繁にパウリーネの名前が登場する。11月16日にゴータに帰る際、パウリーネは丁寧にお礼と暇を告げたが、彼女の馬車をほとんど追いかけたが如く、1日も経たないうちにゲーテから「ごきげんよう、愛しく善良なパウリーネ、出立の時そのままに朗らかな貴女であれ」(WA IV-20, S.216)と願うとともに、また消息を教えてください、そして時には私から貴女に本や他にもちょっとした贈り物をお届けするからね、という内容の書簡が届いた。

1809年5月29日、パウリーネは「スマイルと鈴蘭で作った花束 *Veilchen und Maiblumen*」¹⁴のお返しに、ゲーテから印刷された詩『ヨハンナ・ゼーブス *Johanna Sebus*』を数枚贈られた。これ

¹²Wahle, Julius: *Gäste im Goethehause*. In: *Jahrbuch der Goethe-Gesellschaft* 12 (1926), S.218-222.

¹³前掲論文、S.218 参照。

は1809年1月13日、ライン河畔のクレーヴェ村で川の氷が融けて氾濫、堤防決壊時、救助を行っている際に濁流にのまれて命を落とした少女の実話を物語詩にしたもので、説明的な語りと対話が交互に出てくる、朗読向きの構成である。早速彼女はこの詩をミュンヘンのカロリーネに転送、8月7日付のカロリーネからは、心からのお礼の言葉に続けて「こんな事件に心を動かされるゲーテに興味を覚える」、「朗読は難しいが、ドラマティックな効果が期待でき、付曲にも向くだろう」というコメントがあった（Waitz, S.20）。事実、ゲーテの親友で音楽家のツェルター（1758-1832）は、この詩をピアノ伴奏付独唱・合唱曲に仕立てている。

4. パウリーネとシェリング

1809年9月、久々にマウルブロンに住む両親を妻カロリーネと訪ねていたシェリングから、ゴッター家に訃報が届く。カロリーネが9月7日に赤痢で急死したという知らせだった。この夏、ゲーテはカールスバートに行かなかったので、パウリーネはご機嫌伺いに自ら刺繍した手紙入れを郵送した。常のことながら、ゲーテはちょっと気の利いた贈り物を添えて礼状（10月22日付）を返してきた。前述したようにパウリーネがシェリングに宛てた最初の書簡は、1809年9月23日付の母の代筆状だったが、老詩人とのやりとりを嬉々として伝えてきた文通相手カロリーネがこの世の人でないことを思うと寂しい、とパウリーネは続く11月7日付書簡でシェリングに書き送った（Waitz, S.21）。シェリングは、亡き妻について忌憚なく話せる、数少ない好ましい相手として、パウリーネと文通を続けた。ちなみに1810年5月27日付の書簡で、シェリングはパウリーネに「確か貴女が送ってくれたゲーテの『ヨハンナ・ゼーブス』を故人が気に入って、大事にしている、繰り返し朗読してくれた」、「朗読が難しいがゆえに、二重の価値を置いていた」などと回想している（Waitz, S.20）。

しかしシェリングとパウリーネの往復書簡で重要な役割を果たすのは、故人カロリーネの追憶ではない。ヴァイマル在住の年長の詩人ゲーテこそ、両者のアイドルであり、共通の話題だった。1810年3月にヴァイマルのゲーテ邸を訪問したパウリーネは、5月12日付の書簡で、シェリングに詩人ゲーテの近況を報告。これを皮切りに、パウリーネはゲーテから手紙をもらう度にその内容をシェリングに報告するようになる。

秋にイエーナ近郊の親友ジルビーの自宅で長逗留したパウリーネは、ゲーテの『色彩論』や『ファウスト』の進捗を度々報告し、シェリングを喜ばせた。1811年3月の書簡では、「ゲーテが『色彩論』の感想を執拗に求めてくるけれど、どう答えればいいでしょう」とシェリングに相談したり（Waitz, S.30）、同年10月23日付ではヴァイマル中のスキャンダルとなったゲーテの妻クリスティアーネとゲーテを熱狂的に崇拜するベッティーナ・フォン・アルニムの対決¹⁵を伝えたりもしている（Waitz, S.38）。

¹⁴ちなみに当時ゲーテが執筆していた『親和力』のヒロイン、オットーリエについては複数のゲーテのお気に入りの若い女性たち（パウリーネ、ジルビー、フロマン夫妻の養女ミンナ・ヘルツリープなど）が実在モデルとして挙げられているが、たとえば第2部第9章の終わりにある「オットーリエの日記」にはパウリーネがゲーテに贈った通りの「スマレと鈴蘭の花束」が登場することも指摘されている。

他方、シェリングも 1812 年 2 月 25 日付ミュンヘンからの書簡では、「献本したはずの自著 [Denkmal der Schrift von göttlichen Dingen des Herrn Friedrich Heinrich Jacobi] にゲーテから全く反応がない」(Waitz, S.40) と不安を吐露し、パウリーネから、彼女が次回ヴァイマルを訪ねた時に何か耳にするはずだが、「ゲーテは貴方を敬愛しているから大丈夫です」と慰められている。このように両者の文通テーマは、もっぱら彼らの「愛すべき老紳士」すなわちゲーテであり、パウリーネは時間の経過とともに、先妻カロリーネが担っていたシェリングの慰め役も果たすようになっていた。そんなパウリーネに直接会ってみたいという欲求がシェリングに芽生えたのも、自然な展開だった。

こうして 1812 年 5 月 30 日、シェリングはリヒテンフェルスでゴッター母娘と待望の再会を果たし、即婚約、6 月 11 日にはゴータでスピード挙式した。敬称から親称に変わり、「私の最愛の子 Mein liebstes Kind」、「天使のような君 Du Engel」と呼びかけるシェリングの恋文 (Waitz, S.42) は、直接会ったことで生じた両者の関係の劇的変化を物語る。もっともパウリーネは夫に「フリッツ」の愛称は使わず、生涯「シェリング」と呼び続けた。シュトゥットガルト在住の弟カールへの結婚報告でシェリングは、23 歳の新しい伴侶を「背は高く、ほっそりとしていて、自然と言うよりは、想像力が作りだした作品 (Werk der Phantasie) のように見える」(Waitz, S.44) と惚気ている。

5. 晩年のゲーテとシェリング夫妻

シェリングの妻となったパウリーネはミュンヘンに居を移したため、親友ジルビーやゲーテを直接訪問することは難しくなった。1814 年 11 月 2 日付ミュンヘンからゲーテに宛てて¹⁶、シェリング自身はゲーテにパウリーネの名前を出すことなく、「私が望みうるすべてを持つ女性と結婚しました」と記し、「彼女からも貴方に心からの親愛とともによろしくとのことですよ」と報告した。

¹⁵1811 年 9 月 11 日、ヴァイマルの絵画展でゲーテ夫妻共通の友人であり、また絵画学校校長も務める画家ハインリヒ・マイヤーの作品を、ベッティナー・フォン・アルニムがけなし続けたので、我慢がなくなってきたゲーテの妻クリスティーネが彼女の眼鏡を叩き落とし、対するベッティナーもクリスティーネを汚い言葉で罵って、以後ゲーテ邸への立ち入り禁止となったという事件 (但し当事者以外の目撃者はなし)。邦訳で読める参考書では、ジークリット・ダム著、西山力也訳、『クリスティーネとゲーテ 詩人と生きた女性の記録』法政大学出版局、2011 年、504 頁以降などに詳しい。もっともパウリーネのゲーテ夫人に対する態度は、ヴァイマルの他の淑女たちと同様、見下して面白がる様子で、ゲーテの正妻として接したショーペンハウアーの母とは全く異なる。ちなみにまだカロリーネが健在だった 1809 年 3 月、パウリーネが 1 月末にヴァイマルの劇場にゲーテと居たと誤解した彼女は、ベッティナーを『遍歴時代』に収められた小話「さすらいの気のふれた女 *Die pilgernde Törlin*」になぞらえ、「(パウリーネを) ライバル視しているから注意しなさい」という内容の警告を送っているのも興味深い。この書簡は勘違いの内容にもかかわらず、カロリーネの代表的書簡と作品を抜粋した Immer, Nikolas (Hg.): *Caroline Schlegel-Schelling. Romantikerin mit spitzer Feder*. Weimar 2013, S.98ff. などにも収められている。

¹⁶*Briefe an Goethe*, Hrsg. v. Karl Robert Mandelkow. Hamburger Ausgabe in 6 Bdn, hier Bd.2, S.158. Nr.438 から引用。あわせて Waitz の S.56 ほか参照。

「マダム・ルチファー（墮天使夫人）」の異名をとり¹⁷、魔性の女として教授夫人たちからとかく評判が悪く、除け者にされていた先妻カロリーネとは正反対に、パウリーネはシェリングの伴侶としてミュンヘンやエアランゲンの大学同僚や学生から抵抗なく受け入れられ、慕われた。もっとも 1816 年にシェリングのイエーナ大学再招聘話が浮上しているが、この人事はシェリングが知らぬうちに、ゲーテが握り潰し、白紙に戻されている。しかし一旦途絶えたかに見えたシェリングとの文通は、興味深いことに 1820 年代後半に再開される¹⁸。

シェリング夫妻は 1822 年以來、カールスバートで度々保養休暇を過ごしているが、高齢になったゲーテは遠出を控え、もはや湯治に訪れることはなかった。だがヴァイマル宮廷関係者は依然多く保養に来ており、そのひとりヴァイマル大公子妃マリア・バプロフナ付き女官フリッチュ伯爵夫人の仲介で上記 1827 年の文通は再開されたのだった。1829 年 8 月、傘寿を迎えるゲーテに、夫シェリングから、ゲーテを讃える講演（バイエルン王ルートヴィヒの誕生祭に読んだもの）の抜刷代送を頼まれたパウリーネは、久しぶりに自らゲーテに手紙を書いた。長らくペンを執らなかったが、「片時も貴方様を忘れたことはございません」と詫び、「世界中、地球の果てからも祝辞が届いているでしょうが、少なくとも貴方の健康と名声を心から願う私の祈りが、どなたのものよりも切実に天に届きますように」（Waitz, S.55）と記した。これに対して「私の大事なお友だち、貴女の愛らしくも美しい筆跡を再び認めるとともに、また貴方の素敵なお夫君が私に献じて下さった勿体なき論考までお送りいただいたことで、稀有な祝いに嬉しい花を添えて下さいました」と始まる 9 月 29 日付の丁寧な礼状が、ゲーテから彼女に宛てた最後の手紙になった（WA IV-46, S.87f.）。

他方、シェリングとゲーテの文通は前者が後者に宛てた 1831 年 7 月の書簡が最後になった。また翌 3 月 22 日、ゲーテ逝去の報に接したシェリングは激しい衝撃を受け、しばらく仕事が手に着かなかったという。その 6 日後、1832 年 3 月 28 日に書かれたシェリングのゲーテ追悼文は、以下の美しい文で締めくくられている。

ドイツは見捨てられもしなければ、落ちぶれもしなかった。ゲーテが生きている限り、ドイツにはあらゆる弱点と内的動揺を補って余りある、精神の偉大さ・豊かさ・強さがあった¹⁹。

ゲーテとシェリングの関係を語る時、直接交流のあったイエーナ時代（1798-1814）に限られることが多い。実際、ゲーテ邸の出入り、宿泊も許される破格の扱いを受けたイエーナ・ロマン派の人物はシェリング以外になかったし、このイエーナでの 16 年間にシェリングの主要著作が

¹⁷Oellers, Norbert: *Die Dame Lucifer zwischen Revolution und Literatur*. In: Kosellek, Gerhard (Hg.): *Deutsche Romantik und Französische Revolution* : internationales Kolloquium Karpacz 28. September-2. Oktober 1987 Wroclaw: Wydawnictwo Uniwersytetu, Germanica Wratislaviensia LXXX (1990), S.121-135. ただしこの異名は必ずしもネガティブな意味だけを持つものではない、とエラースは結論づけている。

¹⁸ほぼ 10 年ぶりに 1827 年 9 月 22 日付カールスバートからシェリングは書簡を送った。ゲーテはそれに 1827 年 10 月 26 日に返信している（WA IV-43, S.125f.）

¹⁹Schelling: *Über die Verwaisung Deutschlands durch Goethes Tod*. In: Goethe. Vierteljahrschrift der Goethe-Gesellschaft, Neue Folge Bd.1 (1936), S.82 から引用。

生み出されている。だがシェリングのミュンヘン移籍後も、両者は形態学や芸術といった共通の関心を持ち続けた²⁰。もっともパウリーネと再婚してからのシェリングは3男3女、計6人もの子室に恵まれ、穏やかで幸福な家庭生活を送った反面、大作『世界諸世代 *Weltalten*』²¹——ちなみにこの着想はゲーテから得たとのことである²²——も未完に終わり、重要な作品を発表したとは言えない。他方、ゲーテはたとえば1828年に友人ボワスレーを通して、シェリングのミュンヘン大学での哲学講義におけるヘーゲル批判もほぼリアルタイムで把握していたし²³、1831年に『ファウスト』第二部「古典的ヴァルブルギスの夜」の場面執筆の折にはシェリングに献呈された『サモトラケの神々 *Über die Gottheiten von Samothrake*』(1815)を自家書庫から引っぱり出して再読し、パロディー化して用いた²⁴。

スキャンダルや批判に耐えながら、シェリングの哲学者としての生産性を刺激し続けた才女カロリーネと比べるなら、後妻パウリーネは対極に位置づけられる。けれどもシェリングは先妻カロリーネに対する愛情をパウリーネに隠す必要はなく、一緒に故人を追憶することが許されていた。加えてシェリングの妻たちの間には、シェリング以上にゲーテを話題の中心とする親しい交流が存在した。このようにイェーナ時代ほど緊密ではないにせよ、地理的に離れても、生涯続いたゲーテとシェリングの交流を考える時、パウリーネの存在を無視することはできないだろう。

²⁰ゲーテとシェリングの美学論については、松山壽一、『造形芸術と自然 ヴィンケルマンの世紀とシェリングのミュンヘン講演』、法政大学出版社、2015年に詳しい。

²¹『世代論』などとも訳される。前掲書28頁註6で、著者・松山は『世齡』を提案している。

²²Braun, Otto: *Goethe und Schelling. Eine Studie*. In: *Goethe-Jahrbuch* 9 (1922), S.199-214, hier S.208.

²³*Briefe von Goethe*, Hrsg. v. Karl Robert Mandelkow. HA 4, S.271 (同巻末註 S.610 以降) Nr.1391 参照。

²⁴Braun, *Goethe und Schelling*, S.208 参照。